

『狭衣物語』における"うるはし"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-11-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 北村, 英子 メールアドレス: 所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4661

『狭衣物語』における「うるはし」

北村英子

『狭衣物語』は、『源氏物語』以後おびただしく物語が作られた中で、最も構想がよくまとまった作品の一つである。とりわけ『源氏物語』を範として描かれている部分と、別世界を着想しつつ描かれている部分とが読み取れる。また文章表現の継承や語句の採択なども、『源氏物語』の影響下にあると思える箇所がある。

こういった作品において「うるはし」という語の意味や用法などはどうか。その諸相について、用例をすべて検討しながら考察していく。

『狭衣物語』は異本が多く、本文によって「うるはし」の個数も異なりをみせる。新編日本古典文学全集『狭衣物語』などでは五個を数えるが、新潮日本古典集成『狭衣物語』などでは七個を数える。本稿においては、「うるはし」の数が多し、新潮日本古典集成『狭衣物語』を用いて検討する。

一番目の用例である。

① 楽の声々いとど近くなりて、紫の雲たなびきわたると見ゆるに、
びんづら結ひて言ひ知らずをかしげなる童の、装束うるはしく
したるかうばしきもの、ふと降り来るままに、糸遊か何ぞと見
ゆる薄き衣を、中将の君にうち掛けて袖を引きたまふに、我も
いみじくもの心細くて、立ちとまるべき心地もせず、
(上・巻一・三三頁)

とある。しかし、新編日本古典文学全集の当該箇所をみると、

楽の声、いとど近くなりて、紫の雲たなびくと見るに、天稚御
子、角髪結ひて、言ひ知らずをかしげに香ばしき童にて、ふと
降りゐたまふと見るに、糸遊のやうなる薄き衣を中将の君にう
ち掛けたまふと見るに……。

とあり、「装束うるはしくしたる」の本題の部分が欠けている。だ

が、前者にはなく後者の文面にのみ、傍線を施した「天稚御子」という天童を思わせる言葉が付加されている。こういった両者の文面を突き合わせることによって、本題の「うるはし」を考察していくものとする。

この用例文の場面は、中將が帝に強要されて吹いた笛の音に魅せられて、天稚御子天降るという内容の箇所である。天稚御子が髪を角髪に結って何とも言いようもなく可愛らしく、装束は端正にしてかぐわしい香りがする童が、不意に降臨してきたのである。

「うるはし」はこういった崇高感のある天の神、天稚御子の装束が、乱れもなく整ってきちんと着用している立派さに対して用いられている。したがって、「うるはし」は端正と訳するのが最もよく、視覚的に自然の乱れたままの着用ではなく、手を加え整え上げた姿をいう。こういった装束の着用に関して「うるはし」を用いている例は、先行文学に多くみられる。

『枕草子』をみていこう。

・ 暁に帰らん人は、装束などいみじううるはしう、烏帽子の緒、
二元結固めずともありなん、とこそおぼゆれ。(60段)

・ 御形の宣旨の、上に、五寸ばかりなる殿上童の、いとをかしげなるを作りて、みづら結び、装束などうるはしくして、中に名書きて、奉らせ給ひけるを、「ともあきらの王」と書いたりけるを、いみじうこそ興せさせ給ひけれ。(178段)

・ 昨日は車一つにあまた乗りて、二藍の同じ指貫、あるは狩衣など乱れて、簾だれ解きおろし、もの狂ほしきまで見えし君達、齋院の垣下にとて、日の装束うるはしうして、今日は、一人づつさうざうしく乗りたる後に、をかしげなる殿上童乗せたるもをかし。(208段)

などがある。こういった例は『源氏物語』にもみられる。

・ よき若人ども三十人ばかり、童六人かたほなるなく、装束なども、例のうるはしきことは目馴れて思さるべかめれば、ひき違へ、心得ぬまで好みそしたまへる。(「宿木」)

・ 君はなよかなる薄色どもに、撫子の細長重ねて、うち乱れたまへる御さまの、何ごともいとうるはしくことしきまで盛りなる人の御装ひ、何くれに思ひくらぶれど、け劣りてもおぼえず、なつかしくをかしきも、心ざしのおろかならぬに恥なきなめりかし。(「宿木」)

・ 宮、日たけて起きたまひて、匂宮「后の宮、例の、なやましうしたまへば、参るべし」とて、御装束などしたまひておはす。ゆかしうおぼえてのぞけば、うるはしくひきつくりひたまへる、はた、似るものなく気高く愛敬つきまよらにて、若君を見棄てたまはで遊びおはす。(「東屋」)

など数多くあり、着用に關して乱れた状態のものを手を加え、きちんと整え美しく仕上げた状態になった姿に対して、「うるはし」は用いられ、そのほとんどの箇所が、端止という意味で使われている。このように検討してみると、『狭衣物語』の①の「うるはし」の用法も意味も、先行文学、「枕草子」や『源氏物語』を継承して用いているのである。

二番目の用例である。

②中将の君も、言出でそめてのちは、いとど忍びがたき心のみ乱れまさりて、つくづくとながめ臥したまへるに、殿の御かたより、「参りたまへ」とあれば、何となく心地のなやましきに、もの憂けれど、さ聞きたまはば、またおどろき騒ぎたまはむも聞きにくければ、装束しどけなげにて参りたまへり。鬢のわたりもいたううちとけて、ないがしろなる御うちとけ姿の、うるはしきよりも、なかなかまた、「かくてこそ見たてまつるべかりけれ」と見えて、見まほしうなつかしきさまのしたまへるを、例のうちゑまれて見たてまつりたまふ。(上・卷一・四八頁)

この場面は、中将が父帝からの源氏の宮東宮妃入内の件を聞き顔色が変わる。という内容の箇所である。

新編日本古典文学全集の当該箇所を少し引用してみると、

装束しどけなげにて、紐のわたりもいたううち解けて、参りた

まへり。うるはしき御姿よりも、かくないがしろなる御ありさまの、またかくてこそ見るべかりけれと、めでたく見えたまふも、

とあり、「うるはしきよりも」の部分が「うるはしき御姿よりも」となっておりわかりやすい。すなわち、中将は装束もくつろいだまま参上なさった。鬢のあたりも別に整えずに、無造作なおくつろぎの姿が、装束をきちんと整えた姿よりも、かえって、このようにくつろいだお姿も見栄えがし、立派に見えるというのである。

「うるはし」は高貴な身分である中将の装束姿が、乱れもなく整ってきちんと着用していることを指す。したがって、「うるはし」は端正という意味で、手を加え整え上げた姿に対して用いられる。

こういった②と同じような内容の描写が『源氏物語』にもある。

男の御さまは、うるはしだちたまへる時よりも、うちとけても
のしたまふは、限りもなう清げなり。(夕霧)

とあり、夕霧の改まった時の堅苦しく格式のある感じの男性を、「うるはし」で表現し、くつろいでうちとけた男性の美しさを「清げ」で表現している。

このように、身なりのきちんとした時よりも、くつろいでうちとけた身なりも、またそれなりに美しい。といった内容の描写が両者似通って出現する。いわゆるこの箇所も『狭衣物語』は『源氏物語』

を踏襲して描写したものとと思われる。もっとも、「うるはし」の意味も用法もそのまま『源氏物語』の通り、『狭衣物語』は継承して用いているのである。

次は三番目の用例である。

③前近く人二三人ばかり候ひても言ふを聞きたまふに、我が御上なりけり。「さてもめづらかなりし夜のことどもかな。音に聞きし天稚御子とかや見てしかな」「うるはしくよかりしかたちかな。この世の人とおおぼえざりき」など言へば、

(上・巻一・三七頁)

とあり、女房達が狭衣の噂話をしている場面である。

新編日本古典文学全集の当該箇所では次のように見当たる。

女房「さてもめづらしかりし世のことどもかな」「音に聞きし天稚御子を見てしかな」

「まことにうるはしく、めでたかりし容貌よ。げに、この世の人にも似ざりき」など言へば、

と、「うるはしくよかりしかたちかな」の評言の部分が「まことにうるはしく、めでたかりし容貌よ」とあり、後者の方が誉め上げ方に感動がこもっている。「うるはし」という誉め言葉が、「めでたし」という誉め言葉を伴って、より強く感動をこめ称讚した例は『竹取

物語』にみられる。

翁、皇子に申すやう、「いかなる所にかこの木はさぶらひけむ。あやしくうるはしく、めでたき物にも」と申す。

とあり、翁が皇子に感動をこめて、金鉦玉と照り輝いている蓬萊の玉の枝は、「不思議なほど立派で素晴らしい物にも」と、最高の誉め言葉を用いて言上している。

こういったことから考えると、本題③の場合も、「この世の人とおおぼえざりき」とあり、天稚御子を別格に扱い絶讚している。したがって、「まことにうるはしく、めでたかりし容貌よ」の本文の方が理に合う。

また、容貌を「うるはし」という語を用い讚美している例は、先行作品に数多く見当たる。先ず『古事記』である。

・「此間に媛女有り。是を神の御子と謂ふ。其の神の御子と謂ふ所以は、二島湮咋の女、名は勢夜陀多良比売、その容貌麗美しかりき。」(中巻)

などがあり、『源氏物語』にもその例はある。

・げにぞ、容貌はいとうるはしくけうらにて、行ひやつれんもいとほしげになむはべりし。何人にかはべりけん」と、(手習)

・紀伊守「それは、容貌かたぢもいとうるはしくよらに、宿徳すどくにて、
際さかいことなるさまぞしたまへる。」 (「手習」)

・同じ年のほどと見ゆる人の、かく容貌かたぢいとうるはしくよらな
るを見出でたてまつりて、観音くわんおんの賜たまへるとよろこび思ひて、

(「夢浮橋」)

などがあり、容貌を「うるはし」という言葉で讚美することは、す
でに古く『古事記』の作品中に存在し、この意味や用法が後世の作
品、『源氏物語』や『狭衣物語』に至るまで継承されてきている。
その美意識は格式が最高に備わった人で、品位・威厳も格別でお顔
が美しく整って素晴らしい。このような魅力的な人に対して、「うる
はし」という讚美の言葉が使われている。「うるはし」を現代語に
置き換えると、「端正」とか「端麗」となる。

次は四番目の用例で、③の連繋文である。

④またある人、「されど、大将の笛持て悩みて、いかにせましと
思ひやすらひたまへりし灯影ほかげのほひ、愛敬あいぎやうに似るものなかり
き。中務なかつきの宮みやの姫君ひめぎみに語りきこえさせしかば、そのままに描かい
たまへりし、御子みこの御かたちは、絵にもうるはしくよらなれ
ば、似たりき。大将の御有様ぞ、『筆及ぶべくもあらず』とて、
果ては破やりたまひにき』など語れば、この三の宮にやと見え
たまふ、少し起き上りて、 (「上・巻二・一三七—一三八頁」)

とあり、絵にお描きになった天稚御子のお顔は絵でも、「うるはし
くよらなれば」と美的語詞を二語連語にし、お顔の美しさを強調
しているのである。

新編日本古典文学全集の当該箇所は次のようになってい

……「中務なかつき宮みやの姫君ひめぎみにぞ、その夜よのことを語りきこえさ
せしを、やがてそのままに絵にかきたまひたりし御子みこの御容貌かたぢ
は、うるはしく、めでたうて、いとようこそ似たりしか。

とあり、「うるはしくよらなれば」の部分は、③の説明で引用し
た新編日本古典文学全集の本文と同じように、「うるはしく、めで
たうて」とあり、新潮日本古典集成とは異文を認めるところである
が、「うるはし」は「きよら」を伴って一まとまりの美の表象を形
成するのが自然なのか、「うるはし」は「めでたし」を伴って一ま
とまりの美の表象を形成するのが自然なのか考察していく。

これについては、③の箇所でも「うるはし」と「けうら」・「きよ
ら」の用例を揚げたが、便宜上再度ここに記すことにする。

この考察は、拙稿「源氏物語における『うるはし』とその周辺語
彙をめぐって」^①によるものである。

げにぞ、容貌かたぢはいとうるはしくけうらにて、行ひやつれんもい
とほしげになむはべりし。何人にかはべりけん」と、(「手習」)

・紀伊守「それは、容貌かたちもいとうるはしうらきようらに、宿徳すうとくにて、際きはことなるさまぞしたまへる。兵部卿宮へいぶけいみやぞいとみじくおはするや。女なにて馴なれ仕しうまつらばやとなんおぼえはべる」など、教へたらんやうに言ひつつく。

(「手習」)

・同じ年のほどと見ゆる人の、かく容貌かたちいとうるはしうらきようらなるを見出でたてまつりて、観音くわんおんの賜たまへるとよるこび思ひて、この人いたづらになしたてまつらじとまどひ焦あられて、

(「夢浮橋」)

と、「容貌」を「うるはしけうら」「うるはしきよら」と、二種の美的語詞を連ね、一まとまりの美の表象を形成している例が『源氏物語』にみられる。もっとも、対象が「容貌」以外の物にも、「うるはし」と「きよら」の二種の美的語詞を融合させて、一まとまりの美の表象を形成している例はある。

・御台おんたい八つ、例の御皿おんひらなどうるはしうらきようらにて、(「宿木」)

などみられるが、しかし、「容貌」を対象とした場合が、比較的多く散見する。したがって、本用例も「容貌」を絶讃する言葉として、「うるはし」という高尚な誉め言葉と、完璧な美を表わす「きよら」という美的語詞とがよく融合し、一まとまりの固く良く整った清浄美、「うるはしきよらなれば」を用いて天稚御子という神童の完

璧な美しさを表している。

異文の「うるはしく、めでたうて」の方は、「うるはし」と「めでたし」の二語が融合して「一まとまりになり、一つの意味を表わす」というよりも、各々一語一語のもつ意味を強く孤立させて用いているように思える。

このように考察してみると、本用例の場合、「容貌」が完璧な美しさであることを表現する言葉は、「うるはしく、めでたうて」より「うるはしきよらなれば」の方が適切であるように思える。「容貌」が美しいことに対して、「うるはしくめでたし」と表現している用例はあまりみられない。

つまり、「うるはしくきよらなれば」の本文の方が、文脈上より自然のように思える。

完璧な神童が、完璧な美しさを匂わせている。それは格式の高い人の、固い感じのする崇高美を指す。「うるはしくきよらなれば」を現代語に置き換えると、「端麗たんれい(または端正)で美しい」となる。

次は五番目の用例である。

⑤人長にんぢやう、「その駒」舞ひて、脱はぎかけたる火影ひかげいとまばゆげなるを、つれなう才さいの男おとこども召し出づれば、若わかき殿上人どのじやうじんなどはいとまばゆげに思ひて、いとうるはしうて帰るもあり、また、うちすがひて愛敬あいけいつきもてなすなどもありつつ、さまさまをかしうぞありける。

(下・卷三・一七一頁)

賀茂神社の相嘗祭、庭火に映える御神楽の夜、人長が「その駒」を舞って、片袖を脱いで肩にかけた舞姿が、篝火に映えて眩しそうなのを、委細かまわず人長に呼ばれて、才芸を披露する人達を次々と呼び出すので、指名された若い殿上人などはひどくてれてしまつて、「いとうるはしうて」帰る者もあり、また、すぐ次いで道化役よろしくおどけた恰好をする人などもあつて、それぞれに面白かつた。という場面に「いとうるはしうて帰るもあり」とあるが、新編日本古典文学全集の当該箇所は、「いと若くて帰るもあり」となつており、「うるはし」という言葉が見当たらない。本論考においては、「いとうるはしうて帰るもあり」の本文により、論を進めていく。

ここで、「いとうるはしうて帰るもあり」の意味を考察すると、この部分は、「うちすがひて愛敬づきもてなすなどもあり」と、両者は対極関係にある。つまり、「うるはし」は「おどけた所作」の対義語と考え、「堅苦しくふるまう」と文脈上現代語訳出来る。

結局、賀茂社頭の相嘗祭の行事の夜である。人長に才芸を披露するため指名され呼び出すので、若い殿上人などはひどくてれてしまつて、大そう堅苦しくふるまつて帰る者もあり、おどけた所作をする者などがあつて、面白いという内容になる。

次は六番目の用例である。

⑥ (賀茂神)「光失する心地こそせめ照る月の雲隠れゆくほどを知らばは

さるは、めづらしき宿世もありて、思ふことなくもありなむものを。疾くこそ尋ねぬ。昨日の琴の音のあはれなりしかば、かくも告げ知らせるなり」と、日の装束うるはしうして、いとやんごとなき気色したる人の言ふと見たまひて、うちおどろきたまへる殿の御心地、夢現ともおぼしわかれず、

(下・巻四・一八七頁)

巻四の冒頭部分である。堀川の大臣の夢に賀茂の明神が顕現して、狭衣の危急を告げ知らせる神々しい姿の人をご覧になって目覚めるのである。いわゆる夢のお告げである。この神々しい姿の人が、日の装束を「うるはしく」着用しているのである。

新編日本古典文学全集の当該箇所も同文で問題はない。この日の装束を「うるはし」と捉えているのは、『枕草子』にもみられる。

・昨日は車一つにあまた乗りて、二藍の同じ指貫、あるは符衣など乱れて、簾だれ解きおろし、もの狂ほしきまで見えし君達の、齋院の垣下にとて、日の装束うるはしうして、今日は、一人づつさうざうしく乗りたる後に、をかしげなる殿上童乗せたるもをかし。

(208段)

と、⑥と同じように「日の装束」を「うるはしく」着用している例が見当たると。

「日の装束」とは束帯を身に付けた男性の正装をいうが、この正

装の礼服をきちんと着用していることを、「日の装束うるはしうして」と表現している。

もっとも、「日の装束」という言葉を用いなくても、束帯の正装を「うるはし」と捉えている例は所々見当たる。

・人のまよひすこししづめておはせむと中納言も思ひて、さるべきやうに聞こえたまふほどに、内裏より、中宮の仰せ言にて、宰相の御兄の衛門督、ことごとしき隨身ひき連れてうるはしきさまして参りたまへり。

(総角)

とある文中の「うるはしきさまして」は「きちんとした束帯の正装をして」と訳すると、文意に合う。

次の用例にもみられる。

・宮、日たけて起きたまひて、匂宮「后の宮、例の、なやましくしたまへば、参るべし」とて、御装束などしたまひておはす。ゆかしうおぼえてのぞけば、うるはしくひきつくろひたまへる、はた、似るものなく気高く愛敬つききよらにて、若君をえ見棄てたまはで遊びおはす。

(東屋)

とあり、匂宮の御装束が束帯の表着に、冠、指貫の衣冠装束という正装姿が、格式張って品格美に満ちあふれ、改まってきちんとしている。こういった人格美を「うるはし」という誉め言葉を用いて表

現している。

⑥の場合は賀茂の明神という神々しい姿の人が、日の装束を格式張ってきちんと着用している。気高く崇高感あふれる賀茂の明神に対して「うるはし」は用いられている。

神様に対して「うるはし」を用いる例は、すでに『古事記』からみられる。

・故、詔りたまひし命の随に須佐之男命の御所に参到れば、其の女須勢理毘売出で見て、目合為て相婚ひたまひて、還り入りて、其の父に曰して言はく、「甚麗しき神来ましつ」とまをしき。爾に其の大神出で見て告りたまはく、「此は葦原色許男命と謂ふぞ」とのりたまひて、即ち喚び入れて、其の蛇の室に寝しめたまひき。

(上巻)

とあり、「甚麗しき神来ましつ」は「非常に立派な神様がいらっしやいました」と訳が出来、「麗し」は男神を誉め称える言葉として用いられている。

この他、神仏に関するものに「うるはし」を用いた例は案外多くあり、尊厳で汚れない神様に対する最高の讃辞として使われている。

今の場合も例外ではなく、賀茂の明神という神々しい姿の人が、日の装束をきちんと着用した乱れのない尊厳で清浄感が満ちあふれた崇高美に対して、「うるはし」という讃辞が用いられている。こ

ういった用法は、古く『古事記』の時代から『源氏物語』の時代へと継承され、そしてこの『狭衣物語』の時代へと、脈脈と受け継がれてきているのである。

次は七番目の用例である。

⑦ (狭衣文)「いつまでと知らぬながめの庭にははつみうたかたあはで

我ぞ消ぬべき

ことわり知らぬを慰めわびてなむ。

「惜しや緒絶えの橋はふみみねど雲居にかよふあとぞひまなき」

など書きたまふを、(東宮)「いづくへぞ。賜べ。見む」とはのたまはずれど、うちさくじりひき奪ひなどはしたまはず。今より、いとうるはしく気高き御心ばへなるに、この殿をばいとうちとけがたく恥づかしきものにぞ思ひきこえさせたまへる。

(下・巻四・二三三—三四頁)

狭衣が東宮の前で式部卿の宮の姫君に文を書くという場面中に、「いとうるはしく気高き御心ばへなるに」とあり、東宮という高貴な品格の高い人柄に対して「うるはし」は用いられている。当該箇所を文脈に沿って現代語訳するなら、「今から非常にきちんとした上品なご性格でいらっしゃるが」となるう。

もっとも、今までの調査の及ぶ限りにおいては、「うるはしき心ばへ」とか「うるはしき心ばせ」という例は見出せないが、「うる

はしき心」という例は数多くある。『源氏物語』に、

・やがて出で立ちたまはむとするを、心やすく対面たいめんもあらざらむものから、人もかくのたまふ、いかならむ、坎日かんじちにもありけるを、もしたまさか思ひゆるしたまはば、あしからむ、なほよからむことをこそ、とうるはしき心に思して、まづこの御返りを聞こえたまふ。(夕霧)

とあり、夕霧という品格のある高貴な人の性格を「うるはし」という語で表している。

また、『大鏡』に、

・世次「それはまた、しかるべき前の世の御報にこそおはしししけめ。さるは、御心いとうるはしくて、世の政かしこくせさせたまひつばかりしかば、世間にいみじうあたらしきことにぞ申すめりし。

とあり、世次の言葉の中に、九条(師輔)の御心を「うるはし」と称讃している。すなわち、最高位の男性の生前の品格のある御心、氣立てが特に勝れている心的現象を表す。

この他にも、高貴な格式のある人物の性格・性質・氣立て・人柄など堅苦しいきちんとして生真面目で、融通性に欠ける場合に「うるはし」は用いられている例が所々に見受けられる。

したがって、⑦においても例外ではなく、格式のある高貴な男性の、東宮という身分に相応しく堅苦しいきちんとした、生真面目で品格の備わった性格に対して「うるはし」は用いられる。

このように検討を加えてくると、王朝文学においては、高貴な人物の品格のある堅苦しいきちんとした、融通性に欠ける性格に対して、「うるはし」は用いられる。

因みに、新編日本古典文学全集の当該箇所はほぼ同文である。

以上、『狭衣物語』の「うるはし」について検討した結果、神に關するものに対して用いられている場合が案外多く、用例①③④⑥の四例が該当する。この内①③④は天稚御子に關し、①は装束着用が端正であること、③④は相貌が美しく整っていることを讚美する言葉として用いている。また、⑥については夢に賀茂の明神が日の装束を着用して顕現する。その着用姿がきちんとして威厳に満ち、崇高感あふれるている場合に「うるはし」は用いる。

こういった神に關するものを、稱賛する場合に「うるはし」語を用いたことは、拙稿、『うるはし』の源流をめぐって―古事記―¹⁾で記したが、いづれ物語の時代になり、貴族文学である『源氏物語』においては、人間世界で、人間でありながら人間離れた人間を描いたりしているのは、神代の世界を描いた『古事記』あたりの影響下にあると考える。

したがって、「うるはし」の用法も、基本的には、『古事記』の流れを汲みながら、平安文学中に摂取し、広がりをもせていく。そしてまた、後世の文学へと受け継がれていった一つが、この『狭衣物

語』の「うるはし」である。本題の用例①②⑥の装束をきちんとして着用した正装・③④の整った美しい容貌・⑦のきちんとした上品な性格・⑤堅苦しくふるまう態度は、『源氏物語』などの先行文学中に用いられていた「うるはし」の対象や意味を継承したものである。このように考察を加えてくると、「うるはし」は崇高な神々しい人に、そして、格式ある上流貴族の堅苦しい姿に対して基本的には用いる言葉である。

(注)

(1) 北村英子『枕草子』の語調―「うるはし」(樟蔭国文学第三十八号)による。

(2) (3) (6) (10) (12) 北村英子『源氏物語』における「うるはし」(『古代中世文学論考第十五集』(新典社)による。

(4) 北村英子『平安文学語彙の研究―『竹取物語』における「うるはし」(大阪樟蔭女子大学論集第44号)による。

(5) (11) (14) 北村英子『うるはし』の源流をめぐって―古事記―(『古代中世文学論考第十一集』(新典社)による。

(7) (8) 北村英子『源氏物語』における「うるはし」とその周辺語彙をめぐって(『古代中世文学論考第八集』(新典社)による。

(13) 北村英子『大鏡』における「うるはし」(樟蔭国文学第四十二号)による。